

曹植の「説」について

谷 口 匡

一、はじめに

「説」という文体は、独立した作品としては唐以前には殆ど書かれなかった。そのことは明・徐師曾の『文体明弁』に「魏晉以来、作者絶はなはた少なく、独り曹植集中に二首有り、而れども『文選』に載せず、故に其の体か関く」と述べられ、魏晉以後、曹植の二篇を除いて「説」が書かれなかったことが指摘されている。

ただ曹植の作以外に全く作られなかったわけではなく、後述するように少ないながら魏晉六朝期にも「説」と銘打った文が見られる。しかし結論からいえば唐以後しだいに盛んに作られるようになった「説」との影響関係が窺える作品は、曹植の作を描いては考えられない。その意味では『文選』が収めなかったとはいえ甚だ重要な作品といえる。今日、よく知られる「説」、たとえば、韓愈の「雜説」

や「師説」、柳宗元の「捕蛇者説」などはいずれも唐代に書かれ、今では「説」という文学ジャンルを代表する作品となっているが、無論これらの作品は突如として出現したのではない。その淵源を尋ね、また「説」の文学の系譜について考える初めとして、本稿では曹植の「説」について検討し、唐代以後に「説」ジャンルが大きく展開する前段階で、それがどのような位置にあるのかを論ずる¹⁾。

二、「画説」と「説疫氣」

四部叢刊に収める明活字本の『曹子建集』など通行する曹植の集では、「説」の作品は「藉田説」と「鬪饑説」しか見られない。したがって『文体明弁』にいう「二首」とはその二篇を指すと思われるが、一方で明の張溥が編んだ「漢魏六朝百三名家集」に収める『陳思王集』では「説」の項目を立ててさらに「画説」および二篇の「説疫氣」を

収め、清・丁晏の『曹集銓評』でもこれを襲う。まずこれら、「藉田説」「鬻穀説」以外の「説」について検討しよう。

「画説」は八十字余りの短い文で、聖人や暴君、様々な君主や男女、高士、后妃など描かれた対象によって人々は異なる思いを抱き、絵画には戒めの作用があると述べる。

ところで唐の張遠彦『歷代名画記』（巻一・叙画之源流）

にはこの文を「画説」としてではなく「曹植に言有りて曰わく」と記した後に引用する。また『太平御覧』巻七五一

でもこれを『歷代名画記』を出典として引くから、もともと

と「画説」と題する文があったかどうかは疑わしい。小野

勝年氏は「彼に『画賛』の撰があるが今は佚し、僅かに

『芸文類聚』『初学記』『太平御覧』等に散見して居るのみ

である。この条は恐らく其の序文の一節であらう」という。

『画賛』の序文であったか否かは確定できないが、かりに

そうだとすれば、『画賛』が散佚した後、唐代の頃にはこ

の文は「曹植の言」として存在し、後世それが「画説」と

名づけられ、一部の別集に取り込まれたのではなからうか。

次に「説疫氣」は二篇が存し、うち一篇は建安二十二年の流行病について書いたものである。その文では当時の惨状を描写し、それは鬼神の祟りなどではなく陰陽の乱れによる異常気象が原因だと推測し、人々が魔よけの護符を掛

けて祟りを除こうとするのはおかしい、と感想を記す。

ただここで問題になるのは「説疫氣」（疫氣を説く）という表題のつけ方である。一般に「説」ジャンルの表題としては韓愈の「師説」（師の説）のように「説」が後にある。「〇〇説」型が多いが、劉禹錫の「説驥」（驥を説く）のような「説」を前に置く「説〇〇」型も「説」ジャンルの作品であることに変わりはない。曹植の「説疫氣」は後者だが、それは本当に一篇の独立した散文であったのだろうか。

『陳思王集』以前では『太平御覧』巻七四二に「曹植説疫氣曰」としてこの作品をそっくり引く。『陳思王集』は恐らくこれにより「説疫氣」と題して集に入れたのである。だが『太平御覧』の書き方は「曹植、疫氣を説いて曰わく」とも読める。その場合はどのような文章だろうか。

前漢の賈誼が文帝に対して、農業を重視し、戦争や干魃に備えて穀物を蓄積しておくことの必要性を説いた文章が「論積貯疏」（積貯を論ずる疏）と題して『賈長沙集』（漢魏六朝百三名家集）所収）に収められる。これは『漢書』食貨志には「文帝、位に即きて、躬ら俟節を修め、百姓を安んぜんことを思う。時に民、戦国に近くして、皆な本に背き末に趨る。賈誼、上に説いて曰わく」とあり、そのあ

とに引用されるものとはほぼ同一である。つまり『漢書』に「上に説いて曰わく」として引く文を、張溥の『賈長沙集』では皇帝に差し出した意見文である「疏」と見なした。一方でこれを敵可均の『全漢文』では「説積貯」（積貯を説く）と題する。すなわちこの文は「疏」ではなく、口頭の弁論に類するものであつた可能性もある。

こうした事例から考え直すと、『太平御覧』の「曹植説疫氣曰」という引き方も「説疫氣」なる表題の文を引いているとは限らない。加えて『後漢書』五行志の劉昭注ではこの文の一部を引く際に「魏陳思王常説疫氣曰」と「常」の一字を加える。この「常て（常に）疫氣を説いて曰わく」という言い方はますますこれが独立した一篇ではなかつた可能性を思わせる。それを「説」ジャンルの文に含めることには無理があるのではなからうか。

「説疫氣」の第二は、「鹹水魚は、川を泳がず、淡水魚は、海に入らない」（鹹水之魚、不游于江、淡水之魚、不入于海）という僅か十六字の文である。これは『芸文類聚』巻九六（鱗介部上・魚）に「説疫氣」と題して引かれる。ただ上海古籍出版社排印本の汪紹楹氏の校記では、『太平御覧』に引く上記の「説疫氣」を根拠として「疫」は「疫」が正しいとし、『陳思王集』や『曹集銓評』では「説疫氣」

に作る。

しかしこの断片的な文だけからは「疫氣」との内容的な結びつきは窺えないから、ある長い文の残存部分と考えられる。あるいは一つめの「説疫氣」も断片とすれば、二つは同じ文のそれぞれ一部かもしれない。いずれにしてもこれが『芸文類聚』鱗介部に引かれるのは魚に関する記述があつたからであらう。だがこれがまとまつた一篇として残らなかつたのは、もともと曹植が自身の雜感を述べようとして書いたものではなく、第三者が曹植の発言に関して断片的に記録したものだったからではなからうか。

以上より「画説」と「説疫氣」が元来一篇の独立した作品であつたかは甚だ疑わしい。徐師曾の指摘する二篇の「説」は、「藉田説」と「鬻饅説」を考えてよいと思われる。

三、「藉田説」

「藉田説」は、『陳思王集』で二つに分けるのに従えば、その第一段は「春耕於藉田」の一句で始まる部分である。表題とこの冒頭の一句に現れる「藉田」とは、古代、天子や諸侯が人民を徵用して耕作する田畑のことで、天子や諸侯は毎年、春の農作業の前になると藉田を自ら耕して農業重視の姿勢を示したとされる。ここでは、君主である話者

(寡人) がそばに控える郎中令に語りかける形式をとつて、君主自身が藉田を耕すことの意義を述べる。すなわち君主の言葉を通して、藉田が単なるもの珍しい行事ではなく、田畑の区画や耕作のやり方一つ一つに君主の人となりや治世の方針が示されることを言う。

春に藉田を耕し、郎中令が私(君主)のそばに控えている。私は郎中令をふり返つて次のように言う、「昔、神農氏をはじめて百草を嘗め、民に五穀を植えることを教えた。今、私がこの藉田を耕すのは、これを国を治めることに喩えようと思うのであつて、単に耳目を楽しませるためではない。耕した田地は一万畝、それらはみな肥沃な田で、あぜは南北を貫き、東西に通ずる。珍しい柳が道の両側に生え、名高い果実が果樹園に植わる。実質は宰農の官が管轄するのに、公田というのは、私の領地でもあるのだ。日没後に館に帰り、日の出前には田野に赴くのは、私が臣下に先んじて働くことでもあるのだ。他の田に比べて豆や豆の葉が繁茂し、稲や黍の生長が著しいのは、私の政治の実績でもあるのだ。泉のほとりで憩い、木陰で休み、舜帝を思い慕つて、飾りのない琴を奏するのは、私が礼樂に親しむ方法でもあるのだ。……」⁽³⁾

以上の第一段が君主の言葉に終始するのに對して、第二

段は太子の属官である中舍人と君主の間答を繰返す形式である。国境を守る役人である封人が鑿と鉤を除去したために樹木が繁茂したことを冒頭で述べたのち、蝸をめぐる中舍人の質問と君主の回答が三度なされる。一度目の質疑は天下を治める帝王における蝸、二度目は諸侯における蝸、三度目は君子における蝸についてである。君主はそれぞれに對して具体的事実をあげながら答えていく。

封人に小型の鑿や長い鉤を用いて樹木の蝸を除去できる者があり、樹木はおかげでよく茂つた。中舍人は「天下の治め方を知らない者も蝸がいる者か」と尋ねた。私(君主)は「昔の三苗・共工・鯀・驩兜は、堯における蝸ではないか」と答えた。中舍人は「諸侯の国にも蝸がいるか」と尋ねた。私は「斉の田氏一族、晋の六卿、魯の三桓は、諸侯における蝸ではないか。だがこの三国には小型の鑿や長い鉤の役目がおらず、斉は乗つ取られ魯は弱体化し、晋が分裂に至つたのは、痛ましいことだ」と答えた。中舍人は「君子たることを知らない者にも蝸がいるか」と尋ねた。私は「確かにいる。富んで傲慢になり、出世していばり、仁や義を損ない、蓄財に耽り、女色を喜ぶのも、君子における蝸だ。天子は耕作に

精を出して、一國を經營する。大夫は耕作に精を出して、代々祿を食む。君子は耕作に精を出して、美德を天下に示す。そもそも農耕は、種まきに始まり、收穫に終わる。雨がよい時期に降り、苗が育つていても、放つておいて耕作しなければ、荒れ地になる。思うに豊作の年にきつとよい收穫があるように望むのは、道術を修める者が死後に仙人になることを期待するのに喩えられよう」と答えた。⁽⁴⁾

この第二段だけを見て疑問に感じられるのは、題名の「藉田」との関わりである。三度目の問答に至つてようやく農耕と関連づけられるが、結局、藉田の問題には收斂しない。

『陳思王集』では二つの部分を完全に分けて二作品のように見なし、『曹集銓評』『曹植集校注』では表題の下に「一首」と加える。一方、宋本『曹子建文集』（続古逸叢書）は第一段のすぐあとに「又曰」という二字を入れて第二段を続け、あたかも全部で一作品のようにし、四部叢刊本『曹子建集』も同様である。「藉田の説」という表題との関わりで考えると後者でなければならぬ。『曹集銓評』はさらにいくつかの「藉田説」の断片と思われる文を博搜し列挙するが、これらも含めて一作品だった可能性もある。

このように元來は一篇の作だったと仮定すると、そこに重要な特徴が見出せる。一つは叙述の形式である。第一段だけを見ると君主から郎中令への一方的な語りのように思えるが、第二段では中舎人の質問に君主が答えていく文字通りの問答になっている。したがって作品全体では問答形式が成立していたのではなからうか。

もう一つは寓言性である。藉田を主題に取り上げた意図は文中の「國を治めることに喩えようと思う」の語が説明する。第一段では田地のことを述べながらそこに君主の治國の姿を見る。第二段では樹木を枯らす蝸を堯の世や歴代の諸侯に当てはめ、現在の君臣のあり方に及ぼす。

『文心雕龍』論說篇では伊尹や呂尚など上古の賢人や戦国時代の遊説家による弁論、范雎や李斯らの上書を「説」として例示し、「説の善き者は、伊尹、味を論ずるを以つて殷を隆^{さか}んにし、太公、釣りを弁ずるを以つて周を興す。……戦國、雄を争うに暨^{およ}んで、弁士雲のごとく踊る。……范雎の事を言い、李斯の逐客を止むるは……此れ上書の善説なり」と言う。それら古代の「説」は口頭の弁論を基礎としたものだが、とりわけ先秦の諸子にはある主題について語り手が聞き手を説得する技法としての「説」が多く存し、「藉田説」に見られた問答形式や寓言性と共通する。⁽⁵⁾

また上書の類、たとえば李斯のそれは「上書秦始皇」の題名で『文選』巻三九にも収められるが、対句や四字句を多用し、表現に装飾を加え、「賦」へと繋がる要素を多分に具えている。「藉田説」は同じく書かれた作品ではあつてもそれとは異なつて修辭性よりも寓意に重心を置き、馬と伯樂の關係を述べて實際は人材登用の問題を論ずる韓愈の「雜説」など唐代以後の「説」に近い側面をもつ。なお藉田という同じテーマでより修辭性を強めた「賦」ジャンルの作品には、潘岳の「藉田賦」(『文選』巻七)がある。

『文心雕龍』では曹植の「説」への言及はないが、「藉田説」は古代に口頭の技芸であつた「説」を、その特色を受け継ぎながら文芸作品化し、唐代以後の「説」の萌芽を生み出したといえよう。

四、「觸髅説」

「觸髅説」は曹子と觸髅との對話から成り、ひたすら死を哀れみ生に執着する曹子に觸髅が反論するという筋である。この作品は文中に「莊子が楚に行き、偶然夢に現れた觸髅と心を通じたのに惹かれた」(慕敵周之適楚、儼託夢以通情)とあるように、『莊子』至樂篇のいわゆる「觸髅問答」を踏まえているのは明らかである。ここではその構

造に注目しながらまず「觸髅問答」の概略を確認しておく。莊子が楚に行く道中に觸髅を見つける。彼は觸髅に死因をあれこれと尋ね、それを枕にして寝てしまう。すると夜中に夢に觸髅が現れ、死の説を聞くかと問う。莊子が同意すると、觸髅は死の世界の楽しみを述べる。莊子は信じずになおも生き返ることを望むかと問う。觸髅は深い憂いの表情を浮かべ、今の楽しみを捨てて生の苦しみに戻ることはないと拒否するところで終わる。

曹植の「觸髅説」は作者に擬する人物と觸髅の對話という同じ構造をとりつつも、それに洗練を加え、発展させている。しかしそうした加工は必ずしも曹植の独創ではなく、彼以前に同じテーマで後漢の張衡が「觸髅賦」(『全後漢文』巻五四)を作った時になされ、その影響を受けている。たとえば、まず冒頭、「觸髅問答」がいきなり「莊子は楚に行くと、肉の削げ落ちた觸髅を見た」(莊子之楚、見空觸髅)の一文で始めるのに対し、「觸髅説」では曹子が觸髅を見つくるくだりを、

曹子が池のほとりを散策し、草むらを歩んでいると、その付近は寂しくひっそりしている。奥まった荒れた地を進んでいくと、ぼつんと觸髅が一つあるのを見た。⁽⁷⁾と記し、場面の設定に潤色を加え、いささか物語性を付与

する。ただこうした加工は「髑髏賦」ですで行われ、

張平子は天の九つの分野を見渡し、八つの方角に死生の変化を観察しようとしていた。星や太陽が天をめぐる、鳳や竜が飛翔している。南方の原野に出かけ、北方の奥まった村に入り、西方の昧谷を経由し、東方の扶桑に達する。秋の終わりになつて、微風が涼しさを運ぶ。少しばかり車の向きを変えて、左に右にと上つてゆく。原野に馬を進め、丘陵を走り回る。すると髑髏が、道端に放置されているのを見た。

とあるように、髑髏を見るまでの情景が詳しく述べられ、賦に特徴的な叙事性、描写性が顕著である。それに比べれば「髑髏説」は短いが、それでも「髑髏賦」の内容を要約した記述を加えて、物語的な要素を出している。

次に髑髏に対して死因を尋ねる。その場面は「髑髏説」は「髑髏問答」をほぼ踏襲し、「あるいは……か、あるいは……か」(将……、将……)と質問を畳みかける。ここから「髑髏問答」では莊子が髑髏を枕に眠り、髑髏が夢に現れて語るのに対し、「髑髏説」では、曹子が嘆息し悲しむうちに、かすかに気配がして形は見えないのに影が現れ、髑髏が話し始めるが、この変化もすでに「髑髏賦」に兆しがある。すなわち「髑髏賦」では、

その時、ひっそりとして霊のみがあり、不思議な響きだけが聞こえ、その形は見えぬまま、答えて言った、：

とあり、「髑髏説」でも同様に、

その時、何かが来たような大きな音がし、ぼんやりと何かがあるような気配がして、影は現れたが形は隠れたまま、声高に言った、……

となつてゐる。

髑髏が語り出す時の状況にはこのような違いはあるが、その言葉には「髑髏問答」と「髑髏説」の両方で大きな共通点がある。「髑髏問答」では「あなたの話ぶりは弁士のようだ。だがあなたが言うことは、みな生きた人間の苦しみである。死にはそれがない。あなたは死の説を聞きたいか」(子之談者似弁士。視子所言、皆生人之累也、死則无此矣。子欲聞死之説乎)と言う。ここでは莊子の言葉の流暢さを褒めながら、その内容を批判して自身の「死の説」へといざなう。「髑髏説」に、

あなたはとても言葉がたくみだ。だがまだ幽冥の情に到達せず、死生の説をご存知ない。

と言うのは「髑髏問答」に酷似するが、とりわけ傍点部分のように相手の言論を否定的に受けとめる返答の前置きと

してその言語が表面上は耳に快い、もつともらしいものであることを言う表現は後世、柳宗元の「天説」にも受け継がれ、韓愈の天の説に反論する直前に「貴兄はきつと感ずるところがあつてそうおっしゃるのでしょうか。実に能弁で、みごとなことですよ。」（子誠有激而為是耶。則信弁且美矣）と見える。なおこうした言辞は「髑髏賦」にはない。

「髑髏問答」では髑髏が「死の説を聞くか」と問いかけると莊子が同意し、「死の説」が語られた。髑髏説」ではそのやりとりは省略され、すぐに「死生の説」が始まる。この部分は「髑髏賦」だけが大きく異なっていて、「説」に相当するものがない。その代わりにあるのは張平子に呼びかけられた髑髏の次のような応答である。

私は宋の出身で、姓は莊、名は周といい、心を世の外に遊ばせようとしたが、自らを修めることができなかった。寿命がついに極まり、この奥深い丘に來たのだ。あなたはどういうわけで私にお尋ねになるのか。

それに対して張平子は五岳や天地の神に祈つて肉体を返してもらえよう取り計らおうかと提案する。つまり「髑髏問答」でいえば「死の説」を述べた後の段階に移ってしまった。また髑髏を莊周と名乗らせることで、「髑髏問答」を受け継ぎつつも、作品の構想を変化させようとする趣向が窺える。

「髑髏問答」において髑髏が語る「死の説」は「死には上に君主がなく、下に臣下がいない。また四季の営みもない。ゆつたりと天地の無限の時間を寿命とする。王侯の楽しみもそれには及ばない」（死、无君於上、无臣於下。亦无四時之事、從然以天地為春秋。雖南面王樂、不能過也）という短いものである。しかし、「髑髏説」における「死生の説」はそれをさらに発展させ、死とは「道」に帰ることとして、その「楽しみ」を次のように髑髏に述べさせる。

そもそも死という言葉は帰を意味する。帰は、道に帰ることである。道は、それ自身が無形を根本とするから、自然の変化に順応できる。陰陽は変えられず、四季は減らせない。よって微細な領域に入り、ほんやりとした境地に達し、見ようとしても形は見えず、聴こうとしても音は聞こえない。汲んでも空にならず、注いでもいつぱいにならず、寒気を吹きかけても凋まず、暖気を吹きかけても茂らず、押し流そうとしても流れず、凝り固めようとしても止まらず、静かで暗い。道と関わりあつて、安らかに長く眠ると、これ以上の楽しみはない。

この「死生の説」は「死の説」に比べて長いだけでなく、対偶表現を含み、表現の美しさにも注意を払う。とりわけ

否定表現を連続させた傍点部分が目を引くが、後述するようには「髑髏賦」の影響を受けたものであろう。

こうして主たる説を述べ終えたのちの展開は兩者とも同じで、「髑髏問答」では莊子、「髑髏説」では曹子が、生命を司る神である「司命」により肉体を復元させようかと提案し、いずれも髑髏が拒絶する。ただ「髑髏問答」では「私はどうしても王侯の楽しみを棄てて、世俗の苦しみを繰り返したりできよう」（吾安能棄南面王樂而復為人間之勞乎）という短い語で話を終えていた。「髑髏説」ではそれをさらに展開して以下のように言う。

甚だしいことだ。あなたの話しくさといったら。昔、太素氏が不仁であったため、理由なく肉体を授けて私を煩わし、生を与えて私を苦しめた。今、幸いに化して死に至ったのは、わが本性に帰るのである。何とあなたは苦勞を好み、私は逸樂を好むことか。お引取りくだされ私はこれから太虚に帰ろうとするのだ。¹⁴

ところで「髑髏賦」においても張平子による肉体復元の提案は髑髏に拒絶される。「髑髏賦」ではこの部分の髑髏の言葉が最も長く、さながら一篇の中心の趣きがある。

あなたの言うことはさっぱりわからぬ。死は休息であり、生は勞役である。……（死の世界では）目のよい離

朱でも見る、耳ざとい師曠でも聞く、ことができず、堯や舜に対しても稱賛することはできず、桀や紂に対しても刑罰を下すことはできず、虎や豹でも害することができず、劍や戟でも傷つけることができない。……造化を父母とし、天地を寢床とし、雷や電を鼓や扇とし、太陽や月を灯火とし、天の川を川や池とし、星座を珠玉とする。自然と一体になり、感情も欲望もない。澄ませても清らにならず、混ぜても濁らない。進まないのに到達し、ゆつくりであるのに速い。¹⁵

ここに記された内容は「髑髏問答」の「死の説」を敷衍したといってもよく、『莊子』の思想を反映したものであることは一読して明らかである。また傍点部分のように否定表現を連続させ、内容や修辭の面で「髑髏説」に影響を与えていることが見て取れる。

「髑髏説」に戻れば、「死生の説」のあとに、曹子が從僕に命じて髑髏のちりを払わせ、白絹の頭巾をかけ、赤土や緑樹で覆って道端に葬るといった描写がなされ、最後に、¹⁶
「いたい生と死が情勢を異にするのは、孔子が述べているはずなのに、どんな神靈が髑髏に仮託して私に空論をしかけ、死と生が必ず等しいなどと言うのか」¹⁷
という作者の感慨を漏らして全文を結ぶ。事実上、曹子が

髑髏に言い負かされたのは明らかであるが、なお自問の形で余韻を残すのである。

このように『莊子』の「髑髏問答」はまず張衡がこれをモチーフとして「髑髏賦」を作った時に手が加えられ、描写や問答の言葉が増えるとともに表現が整えられ、「賦」の文体にふさわしいものになった。曹植の「髑髏説」は「髑髏賦」の影響を受けて描写性、物語性が強まり、結果的に「髑髏問答」の主題と形式を一層発展させている。しかしその際、必ずしも「髑髏賦」に従っていない部分もあり、「髑髏賦」で加わった変化から採るべき所を採り、文学作品としての「説」の文体を作り上げていったのである。「藉田説」と比較すると次のようなちがひがある。まず「藉田説」には断絶部分に欠落した本文の存在が予想されるのに比べると、「髑髏説」にも欠落部分はあるのかしれないが、現存部分のみでも十分作品として成り立つ。作品としてほぼ完全な形が残っており、その意味で貴重である。またいずれも問答形式で構成されているが、「藉田説」では会話が作品の大半を占めて描写部分が少なく、全体として議論が連続する印象を与えるのに対し、「髑髏説」には会話の間に場面描写があることで、一種の物語性を有する。

唐代になると、蛇捕りの口を通して重税の苦しみを語らせる柳宗元の「捕蛇者説」のような物語性を帯びた「説」が登場するが、それも作者と蛇捕りの問答という形式をとる。「髑髏説」はその濫觴といえるのではなからうか。

五、「説」と「論」

一方、『文体明弁』に「論と大異無し」と言うように、「説」に似たジャンルとして「論」がある。断片的なものまで含めると曹植にも十篇の作が残っているので簡単に触れておきたい。

曹植の「論」のテーマは種々にわたっているが、いずれも何らかの道理を述べようとしている。叙述の形式からいえばもっぱら論述によつて全体を構成するものが比較的多く、「相論」「成王漢昭論」「釈疑論」「螢火論」「仁孝論」がある。一方、「令禽惡鳥論」と「弁道論」は問答形式を含む。以上は比較的平明な文章で書かれているが、それ以外に対句や四字句・六字句を主とする装飾的な文章で書かれた「魏徳論」「輔臣論」「征蜀論」がある。

これらのうち問答形式の「論」は、「説」と重なり合う面がある。論述に主眼があるため物語性は弱いが、たとえば「令禽惡鳥論」には寓意があり、「藉田説」と似通つて

いる。当時、「論」の範圍は広く、後世「説」が受け持つ範圍を含んでいたと思われる。「藉田説」を「藉田論」に作るテキストがあるのはそのゆえであろう。

六、曹植以外の「説」

上述したように魏晉六朝期には曹植以外にも僅かながら「説」がある。『全三國文』『全晉文』『全宋文』『全梁文』などを繙くとたとえば陸續「渾天儀説」（『全三國文』卷六八）、王蕃「渾天象説」（同卷七二）、吳商「禮祀六宗説」（『全晉文』卷四四）といった文章が見えるが、これらは題名からもわかるように天文や祭祀についての解説文であり、『文体明弁』では「字書を按ずるに、『説は解なり、述なり、義理を解釈して己が意を以て之を述ぶるなり』。説の名、『説卦』より起り、漢の許慎、『説文』を作るは、亦た其の名に祖りて以て篇に命く」と記し、『易』の説卦伝や『説文解字』を例にあげ、物事の意味や道理について自身の見解をまじえて解説する文を「説」の定義として「渾天儀説」「渾天象説」「禮祀六宗説」などは一応それにあたるが、後世、韓愈の「師説」が「師」について自己の見識を加えて、合理的な視点で定義し直そうとしているのなどと比べると、同じ解説でも大きく異なる。

また、徐爰の「旄頭説」（『全宋文』卷四〇）は「旄頭」の意味を晉の武帝と侍臣の問答で明らかにしようとするものである。ただ『全宋文』が依拠する『宋書』礼志を見るとこの問答は徐爰の文ではなく、一事実として記されている。つまりこうした文がそもそも存在していたかどうかは不明で、この議論が『全宋文』に収められる際に一篇の文章であるかのように「旄頭説」と命名された可能性がある。下つて吳均の「餅説」（『全梁文』卷六〇）は特異な「説」であり、全文の大意は以下のようである。

宋公が長安に來た時、姚泓の時の太官丞だった程季という者を得た。賢明な人である。公は「今日の食べ物で何をいけば先によいか」と言った。季は「仲秋のこのあたりの景色は、群れを離れた蟬も鳴きやんでひっそりとなりつつあります。ざわざわと葉を落とす早朝の風、冷え冷えとした夜涼がごいます。私は、このようなありさまにおいて、ただ餅だけを説くことができます」と答えた。公は「よろしい」と言った。季はそこで、「安定郡の噍鳩の麦、洛陽の董德の臼、河東郡の長若の葱、隴西郡の舐背の子牛、枹罕県の赤髓の羊、張掖郡の北門の味噌、これらを銀の粉で燃やし、金の鍋で煮つめます。洞庭湖で霜にあつた橘、仇池山に群生する山椒、これら

を濟北郡の塩で調合し、新豊の鶏をきざんで、華山に産する玉の粉のように細かく、梁甫山に産する銀色の塗料のように白くします。その香を嗅ぐと口中に食欲が満ち、その色を見ると心を乱されます」と述べた。公は「よろしい」と言った¹⁹⁾。

これは福井佳夫氏が指摘するように、遊戯的な意識で書かれた韻文である。臣下の発言に対して君主が「よろしい」

(善)と受ける問答形式は『戦国策』などに見える「説」(善)の原型を想像させ、対句や四字六字のリズムを駆使し、描写性に富む点は「賦」の特色に近い。しかし「義理を解釈して己が意を以って之を述ぶる」ものではなく、その意味で韓柳らの「説」とは方向性を異にする。

管見では曹植の作を除いた魏晋六朝期の「説」はほぼ以上に見え、唐代以後の新しい「説」に繋がる特色は見られない。こうした中でやはり曹植の二篇の「説」、すなわち「藉田説」と「鬪體説」は注目に値しよう。

七、おわりに

曹植の「藉田説」「鬪體説」の二作はいずれも問答形式を用い、さらに前者には寓意性、後者には物語性を具備する。こうした特色は口頭の弁論であつた古代の「説」に見

られたが、曹植の「説」はこれを文学作品として、「賦」とは異なる方向に発展させようとするものだった。この時代、「説」と「論」の差異はなお明確でない面があり、曹植の一部の「論」にも「説」に類似した作品が存する。唐代までの間、膨大な数の「論」が書かれたのに対し、「説」が殆ど残っていないのは、「論」に吸収されたためかもしれない。

「藉田説」の寓意性、「鬪體説」の物語性は、唐代に韓愈や柳宗元がこれをさらに展開させて、新たな「説」ジャンルの世界を作り出す。その様相については稿を改めて論じなくてはならないが、寓意性、物語性、問答形式といった古代の「説」の特色は受け継がれている。曹植の二篇はその継承を媒介する役割を果たしたのではなからうか。

一種の弁論技術である古代の「説」とは異なる、文学ジャンルとしての「説」を韓柳らが確立していくにあたり、曹植の「説」は重要な中継地点に立っていたといえよう。

注

(1) 曹植の作品の引用は、原則として趙幼文校注『曹植集校注』(人民文学出版社、一九八四年)により、同書の校訂に従った。

(2) 『歷代名臣記』(岩波文庫、一九三八年) 一六頁、

(3) 春耕於藉田、郎中令侍寡人焉。顧而謂之曰、昔者神農氏始嘗百草、教民種植。今寡人之興此田、將欲以擬乎治國、非徒供耳目而已也。夫宮囿萬畝、厥田上上、經以大陌、帶以橫阡。奇柳夾路、名果被園。宰農夷掌、是謂公田、此亦寡人之封疆也。日殄沒而歸館、晨未昕而即野、此亦寡人之先下也。菽藿特囿、禾黍異田、此亦寡人之理政也。及其患泉湧、庇重陰、懷有虞、撫素琴、此亦寡人之習樂也。……

(4) 封人有能以輕鑿修鉤去樹之蝸者、樹得以茂繁。中舍人曰、不識治天下者亦有蝸者乎。寡人告之曰、昔三苗共工鯀驩兜、非堯之蝸歟。問曰、諸侯之國亦有蝸乎。寡人告之曰、齊之諸田、晉之六卿、魯之三桓、非諸侯之蝸歟。然三國無輕鑿修鉤之任、終於齊魯魯弱、晉國以分、不亦痛乎。曰、不識為君子者亦有蝸乎。寡人告之曰、固有之也。富而慢、貴而驕、殘仁賊義、甘財悅色、此亦君子之蝸也。天子勤耘、以牧一國。大夫勤耘、以收世祿。君子勤耘、以顯令德。夫農者、始於種、終於穫。沢既時矣、苗既美矣、棄而不耘、則改為荒囿。蓋豐年者期於必收、譬修道亦期於殒身也。

(5) 小南一郎「語から説へ——中國における「小説」の起源をめぐって——」(『中国文学報』第五十冊、一九九五年) 参照。

(6) 韓愈・柳宗元への影響に關しては陳柱『中国散文史』(商務印書館、一九三七年) 一五二頁に言及がある。

(7) 曹子遊平陂塘之浜、步乎藝穢之藪、蕭条潛虛、經幽踐阻、

顧見欄轍、塊然獨居。

(8) 星回日運、鳳華電驪、南遊赤野、北陟幽鄉、西經昧谷、東極扶桑。於是季秋之辰、微風起涼、聊回軒駕、左翔右昂、步馬于囿阜、逍遙乎陵岡。顧見欄轍、委於路旁。以下、『欄轍賦』の引用は原則として賀振剛・胡双宝・宗明華輯校『全漢賦』(北京大学出版社、一九九三年) によるが、その校記を参照して文字を改めた箇所がある。さらにここでは『全後漢文』により「昧穀」を「昧谷」に改めた。

(9) 於是肅然有靈、但聞神響、不見其形、答曰、……

(10) 於是杳若有來、恍若有存、景見容隱、厲声而言曰、……

(11) 子則弁於辭矣。然未達幽冥之情、識死生之說也。

(12) 吾宋人也、姓莊名周。遊心方外、不能自修。壽命終極、來此玄邱。公子何以問之。

(13) 夫死之為言歸也。歸也者、歸於道也。道也者、身以無形為主、故能与化推移。陰陽不能更、四時不能虧、是故洞於纖微之域、通於恍惚之庭、望之不見其象、聽之不聞其声、挹之不冲、注之不盈、吹之不凋、嘘之不榮、激之不流、凝之不停、寥落冥漠、与道相拘、偃然長寝、樂莫是臚。

(14) 甚矣。何子之難語也。昔太素氏不仁、無故勞我以形、苦我以生。今也幸變而之死、是反吾真也。何子之好勞、而我之好逸乎。子則行矣。子將歸於太虛。

(15) 公子言之殊難也。死為休息、生為役勞。……離朱不能見、子野不能聽、堯舜不能賞、桀紂不能刑、虎豹不能害、劍戟不能傷、……以造化為父母、以天地為牀蓐。以雷電為鼓扇、

以日月為灯燭。以雲漢為川池、以星宿為珠玉。合体自然、無情無欲。澄之不清、混之不濁。不行而至、不疾而速。

(16) この部分も「鬲體賦」に「乃命僕夫、飯之以縞巾、衾之以玄塵、為之傷涕、酬於路浜」とあり、その影響が見られる。

(17) 夫存亡之異勢、乃宣尼之所陳、何神憑之虚対、云死生之必均。

(18) 『芸文類聚』卷三九、『太平御覽』卷八二二など。

(19) 宋公至長安、得姚泓時故太官丞程季者、了了人也。公曰、今日之食、何者最先。季曰、仲秋御景、離蟬欲靜。變變曉風、淒淒夜冷。臣当此景、唯能説餅。公曰、善。季乃称曰、安定噎鳩之麦、洛陽董德之磨、河東長若之葱、隴西舐背之犢、枹罕赤髓之羊、張掖北門之豉、然以銀屑、煎以金銚。洞庭負霜之橘、仇池連蒂之椒、調以濟北之塩、釀以新豐之雞、細如華山之玉屑、白如梁甫之銀泥。既聞香而口悶、亦見色而心迷。公曰、善。

(20) 『六朝の遊戲文学』（汲古書院、二〇〇七年）五〇六頁。

(21) このことについては小南氏前掲論文参照。

（京都教育大学）